

平成27年度 高等部 作業グループ

チーフ：坪井 綾美

発表者：加藤 祐樹 小澤 祐一郎

1 グループテーマ

「わかる授業づくりに向けての授業UD化及び合理的配慮の在り方について
～卒後を見据えた作業学習～」

2 テーマ設定の理由

高等部は、毎週火曜日の午前1時間と金曜日全日、作業学習の時間が設けられている。1年生から3年生の生徒が学部縦割りで4つの作業班に所属している。(工芸班・リサイクル班・受注事務班・園芸環境班) 作業学習で研究を行うことで、その研究を通じて他の班の取り組みを共有し、「わかる授業」の実践ができると考え設定した。また、授業UD化及び合理的配慮の研究が3年目ということもあり、昨年度のテーマを継続しつつ、今年度は、武養スタンダードにおける理解構想へ焦点を当てるとともに、より卒業後における職業生活の充実といった観点も視野に入れ研究を進めていきたい。

3 グループの重点的取り組み内容

- ①地域進路先へのアンケートを実施
- ②各作業班で「一人でできる＝理解して取り組める」を目指したわかる授業づくり
- ③進路先への引き継ぎ資料となるフォーマットの作成

4 研究の方法及び経過

(1) 研究の方法

テーマにある「わかる授業」の研究を進めるにあたり、作業学習においての目指す生徒像を「一人でできる＝理解して取り組むことができる」とし、各作業班で“一人でできる”作業を目指し研究を行っていくこととした。また、生徒が実際に生活する場となる地域の進路先の実態や進路先が学校に期待することを知ったうえで研究を行う必要があると考え、横須賀・三浦地域の施設作業所にアンケートを実施した。

(2) 研究の経過

5月12日(火)：研究テーマの決定、研究の進め方について協議および確認

6月16日(火)：各作業班よりビデオ、写真等での情報共有

横須賀・三浦地域の施設・作業所へのアンケートについて検討

7月7日(火)：各作業班より「わかる作業学習の取り組み」について協議

アンケート質問項目、配布・回収方法について確認

9月16日(水):各作業班より取り組み内容の共有・協議、アンケートを受け協議

10月8日(木):各作業班より取り組み内容の共有・協議

10月29日(木):校内研究全大会(中間報告)

11月12日(木):研究まとめに向けて係分担決め、研究紀要作成作業

12月18日(金):研究紀要作成作業

1月7日(木):研究のまとめの原稿集約

5 研究の実際

「わかる授業づくり」の研究を進めるにあたり、作業学習で目指す生徒像を[一人でできる=理解して取り組むことができる]とし、各作業班で“一人でできる”作業を目指し授業UD化と合理的配慮の視点から研究を行っていくことにした。

特別支援教育の理念について文部科学省は以下のように示している。

特別支援教育の推進について(通知)

1. 特別支援教育の理念

特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。

また、特別支援学校学習指導要領(高等部編)には、作業学習は以下のように定義される。

(1) 特別支援学校学習指導要領における作業学習

作業学習は、教科領域等を合わせた指導の一つとして特別支援学校学習指導要領に示されており、作業活動を学習の中心にしながら、生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものとして記されている。

さらに、本校高等部の作業学習の目標は以下の通りである。

- (1) 仕事に関心を持ち、進んで参加する態度を身につける。
- (2) 見通しを持ち、継続的に作業する態度を育てる。
- (3) 道具等の使用に慣れ、巧緻性を高める。
- (4) 働く楽しさや意欲、根気強さ等を身につける。
- (5) 自分の役割に責任を持ち、協力する心を育てる。
- (6) 製品を使ったり、頒布したりすることによって、生産の意味や働く喜びを知る。

文部科学省の示す特別支援教育や学習指導要領から特別支援学校におけるキーワードを「自立と社会参加」と捉え、自立と社会参加のために、本研究では主体的な取り組み=理解して取り組むことができる→“一人でできる”と捉え、本研究を進めてきた。

また、障害児教育学者の小出進氏は、作業学習について、特別支援学校における作業学習の特徴は継続性、また一定の作業を繰り返すことによって、作業を自力で、上手に速く

遂行できるようになる。「させられる作業」から「する作業」へ。「できる状況」（＝一人でできる）をつくる手立ての徹底が重要だと述べている。このことから、「理解して取り組むことができる」＝“一人でできる”ことは大切なことであり、皆が理解して取り組める作業を目指し、構造化された環境での学習や繰り返しの学習経験を各作業班での取り組みとして行った。本研究のまとめにおいては、リサイクル班は個のケースを取り上げ、工芸班は同一作業種内での個に応じた「できる状況」づくりについて、受注事務班は、作業学習全体的における構造化について、園芸班は障害の重度の生徒にスポットを当てた取り組みについて“一人でできる”作業をテーマに本研究の取り組みを作業班別に記載する。

（1）各作業班の取り組み

【リサイクル班】

リサイクル班においては、ケースで1名抽出して研究を行った。

高等部1年 Kさん

◎重点課題

- ・落ち着いて学習する姿勢を身につける。
- ・2語文で自分の気持ちを伝えられるようになる。
- ・1人で学習及び作業に取り組むことのできる時間を伸ばす。

◎作業学習の目標

- ①「できました」の次に「〇〇をください。」といった次の作業を要求することができる。
- ②決められた時間内、集中して取り組むことができる。

作業内容：カッターを使用した電線解体

必要なスキル：①安全にカッターを使用できる。

②カッターの刃の角度を調整することができる。

③カッターの危険性を理解することができる。

<取り組み内容>

導入①初めは簡単なものを選択し提供した。手の置き方に配慮が必要なため、この時期は危険な行動を制止できるよう常に教員を側に配置した。

②他者とのやりとりが好きといった実態があったので、コミュニケーションを取りながら気持ちが他に向かないようにした。

展開①一度に提供する電線の量を増やしていくことで、取り組める時間を伸ばすようにした。

→40分以上の長時間の作業にも集中力を保って取り組むことができた。

展開②難しい電線を提供することで、「お願いします」と自発的な「依頼」の場面設定を行った。

→「おねがい」といった自発的に「依頼」をする場面が多く見られてきた。

展開③作業報告要求といった一連の流れで作業を行うための動線を確保して、一人で活

動ができる場面設定を行った。

→動線の中で活動の内容を理解して、おおむね一人で取り組むことができている。

<まとめと課題>

上記の取り組みによって、道具の危険性を理解することができたので“一人でできる”に向けての取り組みを発展させることができた。4月当初は、教室からの飛び出しや興奮して他害等も見られたが、教員の関わり方や作業の呈示の方法、学習環境を改善していくことで本人の理解習得が進み、現在では自ら準備や片付けもできるようになってきている。“一人でできる”を目的に置くと、コミュニケーション面での課題がある生徒へのアプローチは難しくなるが、それぞれの生徒に応じた“一人でできる”を教員が判断していくことが必要である。

【工芸班】

工芸班は、一つの製品の完成までにはたくさんの工程があるため、生徒たちの目標や実態に合わせて作業内容と「できる状況」を設定し、“一人でできる”をねらいとし一人ひとりに支援を行ってきた。今回はマット織り・皮ストラップについての取り組みをあげる。

1) マット織り

作業内容

織り機に張ってある縦糸に対し交互に裂き布を通していく。張っている縦糸は色が変わっており、白→青の順に裂き布を通していく。

○生徒Aへの支援

縦糸を1本ずつ拾って裂き布を通すことが出来るが、正しい箇所に通すことが難しい生徒である。手立てとしては指差しで通すところを示したり、通す糸の色を言葉かけで示したりしている。その結果、縦糸を間違えず通すことが出来、慣れてくると徐々に指差しの頻度を減らし、言語のみの指示でも取り組むことが出来る場面が増えた。

○生徒Bへの支援

縦糸の色を意識して交互に裂き布を通すことが出来るが、途中で他の糸に通してしまう生徒である。教員の言葉かけで直されることや、机上が乱雑なことから集中が続かず他の場所に行ってしまうことも多かった。しかし、机上を整理し、裂き布を目の前の手すりに10本程度掛け、今やるべき物を提示したことや、チップを使い、今何色の糸に通すのかを毎回確認して作業に取り組むように環境を整えたことで、少ない支援の中一人で取り組む時間が増え、間違えても自分で気付いて直すことが増えてきた。そのため自分のペースで作業に取り組むことができ、一枚を折りあげる事をモチベーションに活動できる時間が増えた。



2) 皮ストラップ

作業内容

革ビーズ、プラスチックビーズを順に糸に通していく作業である。

○生徒Aへの支援

ビーズをつまんで糸に通すことができるが革ビーズとプラスチックビーズの個数や順番を意識して作ったりすることは難しい。また、右から左の順序性の理解が難しいため、カップに必要な分ビーズを入れて、ストラップ1つ分を重ねておき1つのカップが終わったら下のカップに取り組み、すべてのカップが空になったら完成という手立てをとった。その結果、糸に通すビーズがより明確にわかりやすくなり、見守りと少しの支援でストラップを完成させることが出来た。



○生徒Bへの支援

ビーズをつまんで糸に通すことができるが、革ビーズとプラスチックビーズの個数や順番を意識して作ったりすることは難しい生徒に対しては、5つに分かれた製氷皿を用いて必要分のビーズを入れておき、左から順に糸に通して全てなくなったら完成という手立てをとった。必要に応じて言葉かけや促しが必要な場面もあったが、1つの容器が終わったら次の容器と言う流れを理解しスムーズに取り組めるようになりつつある。



<まとめと課題 >

生徒の実態に応じた環境設定(=できる状況づくり)と作業活動の積み重ねによって、少しずつ作業の内容やそれに伴う体の動かし方、活動の流れを理解し一人で取り組める部分が増えてきた。また、年度初めは与えられた作業に受動的に取り組む生徒が多かったが、個に応じた「できる状況」をつくり継続することで、出来栄を気にし、自分で作り上げる事にモチベーションをもって能動的に取り組める生徒も増えた。今後の課題として、作業中における「できる状況づくり」の継続と、それに加えて準備や片づけ、報告等の場面でも環境を整え、出来る状況を作ることで生徒がより主体的に取り組めるようにすることが必要だと考えられる。

【園芸環境班】

園芸環境班では、武養スタンダードにおける『理解』の段階を目指す取り組みとして、多くの作業種がある中から「草取り」の作業に焦点を当てた。草取りでは、抜いた草を校舎裏のスロープを登った草捨て場まで運ぶ作業がある。日常生活の移動において教員の付添を要する生徒も、草を運ぶ場所や自分がやるべきことを理解できた際には、その作業に

一人で取り組むことができるようになるのではないかと考えた。そこで、より多くの生徒が活動内容を理解できるようにするために、以下の3つの段階を設けて作業に取り組んだ。

①教員と一緒に作業に取り組む。

最初は、初めて草取りの作業に取り組む生徒が少しでも活動にのることができるように、常に教員と一緒に、畑⇒草捨て場の間を移動した。

バケツに草を入れる⇒捨て場まで運ぶ⇒バケツから草を捨てる⇒畑に戻る、と決まった流れを教員と一緒に1日に何度も繰り返すことで、少しずつ「草取り」の作業に取り組むことに慣れてきた。



②一定区間、一人で移動する。

次に、草を捨てに行くスロープの上と下でそれぞれ教員が待機し、言葉かけをすることで、上り下りの間は生徒が一人で移動する態勢をとった。



最初はスロープの途中で止まったり、戻ったりする様子が多く見られたが、上と下で教員がそれぞれ適切なタイミングで言葉かけをすることによって、生徒は自分が向かう方向を理解し、一定区間一人で移動することができるようになってきた。その経験を積むことによって、スロープの上に草を持って行くことを少しずつ理解してきた段階である。

③目印をもとに移動し、一人で作業に取り組む。

3つ目の段階として、目印となるコーンとカゴを置き、教員はその近くで見守りをするという環境を設定した。この環境の中で、最初は常に教員が手を繋いで付き添って移動していた生徒も、時間は要したが、バケツを持ってスロープの上まで一人で移動し、カゴにバケツを置くことができるようになった。さらに、カゴに置かれたバケツの草を教員が捨て、空のバケツをカゴに置くと、生徒が自らそのバケツを持ち、畑まで一人で戻って行く様子も見られた。



<まとめと課題 >

上記の取り組みによって、多くの生徒が「草取り」において、バケツを運ぶ⇒草を捨てる⇒畑に戻る、といった作業内容を理解し、草を捨てに行く活動に一人で取り組むことができるようになった。断片的ではあるが、生徒がその内容を理解し、『一人で』作業に取り組むことができたことが、今回の取り組みの成果としてあげられる。

ただ、一人で取り組むことのできる作業、と作業の幅を狭めて生徒に呈示するだけに終わらず、様々な作業を経験するために、生徒に合わせて内容を工夫・考察して呈示していくことも、今後の課題となるだろう。

【受注事務班】

受注事務班では、「理解して少ない支援でできる」を目指し、次の実践について重点的に取り組んだ。

①朝礼・終礼



従来、事務班では朝礼・終礼はめくりカードを使い日直の生徒に司会進行を行わせていた。本年度より前のホワイトボードに一日の日課を掲示し、教員が司会進行をするやり方に変更した。掲示は、日課は文字と絵カード、作業内容・場所は生徒と教員の顔写真カード・作業写真カードと教室の見取り図で示した。これらは、前に

注目できること、今日の流れが一目でわかること、自分の行う作業と場所が一目で見えてわかることによって、理解してできることを増やすことや、朝礼・終礼の流れをスムーズにして、生徒がより中身を理解できるようにすることをねらっている。これにより、前に注目できる生徒が増え、作業の終了ごとに集まることで活動の切り替えがスムーズに行えるようになってきた。この時に挨拶や振り返りと同時に、肩・首・手首のストレッチも取り入れ、自己調整にも努めている。

②場の構造化

生徒が活動の切り替えが行いやすいように、次のような取り組みを行っている。朝礼・終礼の場所と作業場所を分け、各生徒の作業場所を固定する。障害特性を考え、流れ作業が可能で工程やその日の自分の役割を理解できる3名の生徒は隣のPC室に作業場を整えて、指導する教員も固定する。これにより、朝礼・終礼が終わると作業道具を取って自分の作業場所に移動できる生徒が増えた。自ら動けない生徒も指差しや少ない言葉かけで移動できている。また、休憩時間は教室だけでなく、PC室、図書室でも過ごせるように設定している。



③道具の提示方法の改善～生徒の使い方を考えた整理～

生徒が“理解して”できるだけ“一人で”取り組めるように道具の提示の仕方も考えた。まず、生徒の実態に合わせて生徒ごとに名前や顔写真でわかりやすくした個人のカゴを用意して、その日に使う道具をまとめておく。決められた棚からカゴを持っていくと作業が始められるようになっている。また、紙などの共有物も工程別・種類別に分かりやすく場所を決めて教員が作業前までに整理しておき、生徒の要求にすぐに対応し供給できる状態にしておくことで、教員自体も分かりやすく、生徒を待たせることなく様々な作業に取り組み

ている。



④余暇の時間について

受注事務班では余暇の充実にも力を入れてきた。休憩時間は本来、10分間であったが事務班では単なる休憩でなく余暇の学習時間としてとらえ、15分間とした。卒業後の進路先では、余暇を充実させることが、豊かな生活を送るという点でとても重要になってくる。作業の時間を通して、自分の好きなことを見つけて、有意義な時間の過ごし方を身に付けてほしいと考えた。休憩時間には、お茶を飲んだり、クラスから持参した好きな本を読んだりパズルをしたり、PC室でインターネットをしたり、図書室に行き本を読んだり思い思いに過ごす時間を15分間設定している。開始と終了はタイマーで示している。やることを見つからずに過ごす生徒もいるが、ほとんどが、好きなことをして過ごせるようになってきている。これにより、休憩を楽しみにする生徒もでてきて、作業との良いめりはりとなってきている。

<まとめと課題>

以上の実践を1年通して行うことにより、生徒の切り替えがスムーズになり、一定の流れを理解して「一人で」動けるようになってきている。今後は、さらに定着を図るとともに、複数の作業種についても対応できるように取り組みを進めていきたい。また、今後も余暇を充実させる活動を続けることで、生徒の主体性を引出し、さらに「一人で」できるにつなげていければと考えている。

(2) 進路先の実際

本校における地域での自立と社会参加や研究テーマにある「卒後を見据えた作業学習」を考える上で、また、実際に生徒たちが卒業し、生活する場ではどのような取り組みが行われ、また学校に求めることはどのようなことかを把握するために、三浦・横須賀地域の施設作業所にアンケートを実施し、以下のような回答、意見を得ることができた。

アンケート回答内容（抜粋）質問（1）学校の支援について


- ・重度のお子さんほど、わずかな時間でも一人で過ごせる力があるとよい。
- ・少人数制で対応できる故の教員の影響力を認識してほしい。
- ・生徒への対応は能動的な働きかけが必要。
- ・コミュニケーションの力

- ・学校の中で本人に合わせ工夫していた教材や補助具等の情報共有。
- ・生徒がつまづいていること、問題、課題を見つけ出し、アプローチしてほしい。
- ・在学中一人ひとりの個性に教員はどのように対応し、どのような結果が得られたのか、より具体的な対応手段について引き継いでほしい。
- ・学校でのアセスメント情報があいまいなことが多いため、本人の課題となる部分と仕事をする上での長所を明確に伝えてほしいと感じる。

その中でも、“一人で”という視点や学校から進路先への引き継ぎ、コミュニケーション力、人との関わりについて等についての意見が多くみられ、今回めざす姿とした“一人でできる”という点も大きく関わると考えられる。

アンケート回答の中でも、学校がどのような手立てを持って支援し、結果としてどうなったかを示してほしいという旨が多数上がってきている。学校から進路先への引き継ぎ資料は毎年作成し、活動の引き継ぎを実施しているが、今回のアンケート結果より、資料のより一層の充実が求められているといえる。そこで学校と進路先の共通した引き継ぎツールとして、引き継ぎ資料のフォーマットの検討及び作成を行った。卒業後も生徒の“できる(できる状況等)”を引き継ぐために、

その結果に至るまでのアセスメント、アプローチの過程に重点を置いたフォーマットを作成した。高等部3年間で培った作業能力や、個々の生徒が“できる(=理解して取り組める)状況”設定、作業学習における生徒への対応方法等が細かく引き継げるように、年度ごとに所属した作業班、作業内容とその手立て、様子が記載できる様式にした。従来の引き継ぎ資料は、生徒の基本的な実態と問題行動への対処等に重点をおいた引き継ぎとなっていたが、今回は、卒後の豊かな社会生活を支援するために、生徒が“できるための手立て”に重点を置いた引き継ぎを作成した。今年度は、今回作成したフォーマットを意識した引き継ぎを行い、次年度以降は、今回作成したフォーマットを参考に学部としての引き継ぎ資料を作成し、活用していけるとよい。

武山義護学校 高等部作業学習引き継ぎシート		
名前		
作業学習	高等部1学年	〇〇班 穴あけ ビーズ マット継り
	高等部2学年	
	高等部3学年	
高等部1年次 〇〇班所属		
作業内容	手立て	様子
穴あけ 	開ける場所に印をつけた 開ける車と開いた車を入れる密器(机上の構造化) 	
記録者 ()	どんな言葉かけ	
ビーズストラップづくり		

6 まとめ及び今後の課題

本研究テーマにおける研究は今年度で3年目となった。1年目は“わかる授業づくり”に向けて、学習環境における基礎的環境の整備に取り組み、合わせて授業改善の視点から、教員間の支援に対する共通理解を図ってきた。2年目からは作業学習に重点を置き、授業のUD化及び合理的配慮について検討を行った。昨年度からの研究の過程で、4つの作業班が相互に活動の内容を見合い、話し合う土台ができ、“わかる授業”にむけての朝礼、終礼の形態や作業道具の整理や構造化の面において共有化が図られるようになった。今年度は、[一人でできる＝理解して取り組むことができる]を目指した授業改善に向けて、武養スタンダードにおける「参加」の階層から「理解」の階層へのシフトが図られた。

各作業班の取り組みから、「理解」階層の手立てが増え、作業学習の時間において、生徒それぞれの[一人でできる＝理解して取り組むことができる]活動は増加してきていると言える。しかし、作業学習で“できた”ことが、様々な場面で生徒自身が“できる”ことにつながっているとは一概にいうことはできない。作業学習においては、学校という環境における環境整備のもと、場の構造化を図り、反復して定着を図ることが多い。アセスメントから“一人でできること”への支援の移行をより速やかに行うこと、様々な場面への般化を目指すことも今後の課題の一つである。

一方で、卒後を見据え、学校と進路先を繋ぐ「引き継ぎ資料」を作成し、進路担当と連携を取り、学校卒業後と将来の社会生活へスムーズに移行できることで、学校を卒業した生徒が豊かな社会生活を送ることができるよう支援していきたい。

<参考文献>

小出進（2014）『知的障害教育の本質—本人主体を支える』（植草学園ブックス特別支援シリーズ1）ジアース教育新社